

桃太郎

芥川龍之介

日本の神話と十大昔話

あらすじ

桃太郎は、鬼退治に出かけます。鬼が島への道中では、犬、猿、雉の三匹の家来と出会います。彼らの力も借りて、鬼退治に挑むのです。鬼との戦いは壮絶で、鬼の宝物も手に入れるほど、大活躍をします。果たして桃太郎は無事、鬼を退治できるのでしょうか？

目次

-
-
-
-
-
-

—

むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃^{もも}の木が一本あった。大きいとだけではいい足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地^{だいち}の底^{よみ}の黄泉の国にさえ及んでいた。何でも天地かいびやく^こころ^{いざなぎ}、伊弉諾^{みこと}の尊^{よもつひらさか}は黄最津平阪^{やっ}に八つの雷^{いかずち}をしりぞ^みけるため、桃の実を礫^{つぶて}に打ったという、——その神代^{かみよ}の桃の実はこの木の枝になっていたのである。

この木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一度実をつけていた。花は真紅^{しんく}の衣蓋^{きぬがさ}に黄金^{おうごん}の流蘇^{ふさ}を垂らしたようである。実は——実もまた大きいのはいうを待たない。が、それよりも不思議なのはその実^{さね}は核^{あかご}のあるところに美しい赤児^{はら}を一人ずつ、おのずから孕^{はら}んでいたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は山谷^{やまたに}を^{おお}掩^るった枝に、累々^ると実^{つづ}を綴^{つづ}ったまま、静かに日の光りに浴していた。一万年に一度結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかしある寂しい朝、運命は一羽の八咫鴉^{やたがらす}になり、さっとその枝へおろして来た。と思うともう赤みのさした、小さい実

を一つ 啄^{ついは} み落した。実は 雲霧^{くもきり} の立ち 昇^{のぼ} る中に 遥^{はる} か下の谷川へ落ちた。谷川は 勿論^{もちろん} 峯々の間に白い 水煙^{みずけぶり} をなびかせながら、人間のいる国へ流れていたのである。

この 赤児^{あかご} を 孕^{はら} んだ実は深い山の奥を離れた 後^{のち}、どういう人の手に拾われたか？ ――それはいまさら話すまでもあるまい。谷川の末にはお 婆^{ばあ} さんが一人、 日本中^{にほんじゅう} の子供の知っている通り、 柴刈^{しばか} りに行ったお 爺^{じい} さんの着物か何かを洗っていたのである。……

二

桃から生れた ももたろう おに しま せいばつ
桃太郎 は 鬼 が 島 の 征伐 を 思い立った。思い立ったわけ
訣 は なぜか というと、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。その話を聞いた老人夫婦は内心この 腕白^{わんぱく} ものに 愛想^{あいそ} をつかしていた時だったから、一刻も早く追い出したさに 旗^{はた} とか太刀とか 陣羽織^{じんばおり} とか、出陣の 支度^{したく} に 入用^{にゅうよう} のものは云うなり次第に持たせることにした。のみならず途中の 兵糧^{ひょうろう} には、これも桃太郎の 注文^{ちゅうもん} 通り、 黍団子^{きびだんご} さえこしらえてやったのである。

桃太郎は 意気^{ようよう} 揚々 と 鬼が島征伐の途に 上^と った。すると大きい 野良犬^{のらいぬ} が一匹、 饑^うえた眼を光らせながら、こう桃太郎へ声をかけた。
「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます？」

「これは 日本一^{にっぽんいち} の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも 怪^{あや} しかったのである。けれども犬は黍団子と聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄った。

「一つ下さい。お 伴^{とも} しましょう。」

桃太郎は 咄嗟^{とっさ} に 算盤^{そろばん} を取った。
「一つはやられぬ。半分やろう。」

犬はしばらく 強情^{ごうじょう} に、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃太郎は何といっても「半分やろう」を 撤回^{てっかい} しない。こうなればあらゆる商売のよ
うに、 所詮^{しょせん} 持たぬものは持ったものの意志に服従するばかりである。犬もとうとう 嘆息^{たんそく} しながら、黍団子を半分貰う代りに、桃太郎の 伴^{とも} をすることになった。

桃太郎はその^{のち}後犬のほかにも、やはり黍団子の半分を^{えじき}餌食に、^{さる}猿や^{きじ}雉を^{けらい}家来にした。しかし彼等は残念ながら、あまり^{なか}仲の^い好い間からではない。丈夫な^{さば}牙を持った犬は^{いくじ}意気地の^{ばか}ない猿を莫迦にする。黍団子の^{かんじょう}勘定に^{すばや}素早い猿はもっともらしい雉を莫迦にする。地震学などにも通じた雉は頭の^{にぶ}鈍い犬を莫迦にする。——こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかった。

その上猿は腹が張ると、たちまち^{とな}不服を^{うた}唱え出した。どうも黍団子の半分くらいでは、鬼が島征伐の伴をするのも考え物だといひ出したのである。すると犬は^ほ吠えたけりながら、いきなり猿を^か噛み殺そうとした。もし雉がとめなかったとすれば、猿は^{かに}蟹の^{あだう}仇打ちを待たず、この時もう死んでいたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道德を教え、桃太郎の命に従えと云った。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかった。その猿をとうとう^{とくしん}得心させたのは確かに桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げたまま、日の丸の^{おうぎ}扇を使い使いわざと冷かにいい放した。

「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても^{たからもの}宝物は一つも分けてやらないぞ。」

欲の深い猿は^{まるめ}円い眼をした。

「宝物？　へええ、鬼が島には宝物があるのですか？」

「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる^{うちで}打出の^{こづち}小槌という宝物さえある。」

「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せば、一度に何でも手にはいる^{わけ}訣ですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行って下さい。」

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の^{みち}途を急いだ。

三

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山ばかりだった^{わけ}訣ではない。実は椰子の^{やし}簞^{そび}えたり、^{ごくらくちょう}極楽島の^{さえず}囀ったりする、美しい^{てんねん}天然の^{らくど}楽土だった。こういう楽土に^{せい}生を^う享けた鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼というものは元来我々人間よりも^{きょうらく}享樂的に出来上

った種族らしい。^{こぶ}瘤取りの話に出て来る鬼は一晩中踊りを踊っている。

いっすんぼうし

一寸法師 [＃ルビの「いっすんぼうし」は底本では「いっすんぼう

し」]の話に出てくる鬼も一身の危険を顧みず、^{ものもう}物詣での姫君に見とれて

いたらしい。なるほど ^{おおえやま}大江山の ^{しゅてんどうじ}酒顛童子や ^{らしょうもん}羅生門の

^{いばらぎどうじ}茨木童子 ^{きだい}は稀代の悪人のように思われている。しかし茨木童子などは

我々の銀座を愛するように ^{すざくおおじ}朱雀大路を愛する余り、時々そっと羅生門へ姿

を ^{あら}露わしたのではないであろうか？ ^{いわや}酒顛童子も大江山の ^{いわや}岩屋に酒ばかり

飲んでいたのは確かである。その ^{にょにん}女人を奪って行ったというの

は―― ^{しんぎ}真偽はしばらく問わないにしろ、女人自身のいう所に過ぎない。

女人自身のいう所をことごとく真実と認めるのは、――わたしはこの二十年

来、こういう疑問を抱いている。あの ^{らいこう}頼光や ^{してんのう}四天王はいずれも多少気

違いじみた女性 ^{すうはいか}崇拜家ではなかったであろうか？

鬼は熱帯的風景の ^{うち}中に ^{こと}琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を

歌ったり、^{すこぶ}頗る ^{あんのん}安穩に暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も ^{はた}機を織

ったり、酒を ^{かも}醸したり、^{らん}蘭の花束を ^{こしら}拵えたり、我々人間の妻や娘と少

しも変わらずに暮らしていた。殊にもう髪^{きば}の白^ぬい、^{きば}牙の脱けた鬼の母はいつ

も孫^もの守りをしながら、我々人間の恐ろしさを話して聞かせなどしていたものである。――

「お前たちも ^{いたずら}悪戯をすると、人間の島へやってしまうよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子のように、きっと殺されてしまうのだからね。

え、人間というものかい？ 人間というものは ^{つの}角の生えない、^は生白^{なまじろ}い顔や手足をした、何ともいわれず気味の悪いものだよ。おまけにまた人間の女

と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に ^{なまり}鉛^この粉をなすっているのだ

よ。それだけならばまだ好いのだがね。男でも女でも同じように、^{うそ}嘘^いは

いうし、欲は深いし、^{やきもち}焼餅^{うぬぼれ}は焼くし、^{うぬぼれ}己惚^{うぬぼれ}は強いし、仲間同志殺し合

うし、火はつけるし、^{どろぼう}泥棒^{どろぼう}はするし、手のつけようのない毛だものなのだ
よ……」

桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。鬼は^{かなぼう}金棒を忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、^{ていてい そび やし}亭々と聳えた椰子の間を^{うおうざおう まど}右往左往に逃げ惑った。「進め！ 進め！ 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」

桃太郎は桃の^{はた}旗を片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、^{いぬさるきじ}犬猿雉の三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の^{い けらい}好い家来ではなかったかも知れない。が、^う饑えた動物ほど、^{むそう}忠勇無双の兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのように、逃げまわる鬼を追いまわした。犬は^{ひとか}ただ一噛みに鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭い^{くちばし}嘴に鬼の子供を突き殺した。猿も――猿は我々人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を^{しめころ}絞殺す前に、必ず^{りょうじよく ほしいまま}凌辱を恣にした。……

あらゆる罪惡の行われた^{のち}後、とうとう鬼の^{しゅうちょう}酋長は、命をとりとめた数人の鬼と、桃太郎の前に^{こうさん}降参した。桃太郎の得意は思うべしである。鬼が島はもう^{きのう}昨日のように、^{ごくらくちょう さえず}極楽鳥の囀る楽土ではない。椰子の林は至るところに鬼の^{しがい ま}死骸を撒き散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の^{けらい}家来を従えたまま、^{ひらぐも}平蜘蛛のようになった鬼の酋長へ^{おごそ}厳かにこういい渡した。

「では格別の^{れんびん}憐愍により、^{きさま}貴様たちの命は^{ゆる}赦してやる。その代りに鬼が島の^{たからもの}宝物は一つも残らず^{けんじょう}献上するのだぞ。」
「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を^{ひとじち}人質のためにさし出すのだぞ。」
「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度^{ひたい}額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か^{ぶれい}無礼でも致したため、^{ごせいばつ}御征伐を受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様に^{がてん}どういう無礼を致したのやら、とんと合点が参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお^{あか}明し下さる^{わけ}訣には参りますまいか？」

桃太郎は^{ゆうぜん}悠然と^{うなず}頷いた。

「^{にっぽんいち}日本一」[^{ルビ}「にっぽんいち」は底本では「にっぽんいち」]の
桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し^{かか}抱えた故、鬼が島へ征伐に来たの
だ。」

「ではそのお^{さん}三かたをお召し抱えなすったのはどういう^{わけ}訣でございます
か？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、^{きびだんご}黍団子をやっても召し
抱えたのだ。——どうだ？ これでもまだわからないといえ、貴様たちも
皆殺してしまうぞ。」

鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど^{うしろ}後へ飛び^{さが}下ると、いよいよまた
^{ていねい}丁寧^{じぎ}にお時儀をした。

五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供に宝物の車を引
かせながら、^{とくとく}得々と故郷へ^{がいせん}凱旋した。——これだけはもう^{にほんじゅう}日本中
の子供のとうに知っている話である。しかし桃太郎は必ずしも幸福に一生を
送った^{わけ}訣ではない。鬼の子供は^{いちにんまえ}一人前になると番人の雉を^か噛み殺した
上、たちまち鬼が島へ^{ちくでん}逐電した。のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々
海を渡って来ては、桃太郎の^{やかた}屋形へ火をつけたり、桃太郎の^{ねくび}寝首をかこう
とした。何でも猿の殺されたのは人違いだったらしいという^{うわさ}噂である。
桃太郎はこういう^{かさ}重^{がさ}ね^{たんそく}重^もねの不幸に^{たんそく}嘆息を洩らさずにはいられなかつ
た。

「どうも鬼というものの^{しゅうねん}執念の深いのには困ったものだ。」

「やっと命を助けて頂いた御主人の^{だいおん}大恩^けさえ忘れるとは怪しからぬ奴等
でございます。」

犬も桃太郎の^{じゅうめん}渋面を見ると、口惜しそうにいつも^{うな}唸ったものであ
る。

その間も寂しい鬼が島の^{いそ}磯には、美しい熱帯の^{つきあか}月明りを浴びた鬼の若
者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、^{やし}椰子の実に爆弾を仕こんでい
た。^{やさ}優しい鬼の娘たちに恋をすることさえ忘れたのか、黙々と、しかし嬉
しそうに^{ちやわん}茶碗^{かがや}ほどの目の玉を^か赫かせながら。……

六

人間の知らない山の奥に 雲霧^{くもきり} を破った桃の木は 今日^{こんにち} もなお昔のよう
に、 累々^{るいり} と無数の実をつけている。勿論桃太郎を 孕^み んでいた実だけとはと
うに谷川を流れ去ってしまった。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に
何人とも知らず眠っている。あの大きい 八咫鴉^{やたがらす} は今度はいつこの木の
梢^{こずえ} へもう一度姿を 露^{あら} わすであろう？ ああ、未来の天才はまだそれらの
実の中に何人とも知らず眠っている。……

（大正十三年六月）

了

底本：「芥川龍之介全集 5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 2 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 4 月 10 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

初出：「サンデー毎日 夏期特別号」

1924（大正 13）年 7 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 8 日公開

2012 年 9 月 21 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったの
は、ボランティアの皆さんです。